

## 231. 平成6年度滋賀県下における 発掘調査の紹介 その2

### 12. 大洲遺跡の調査

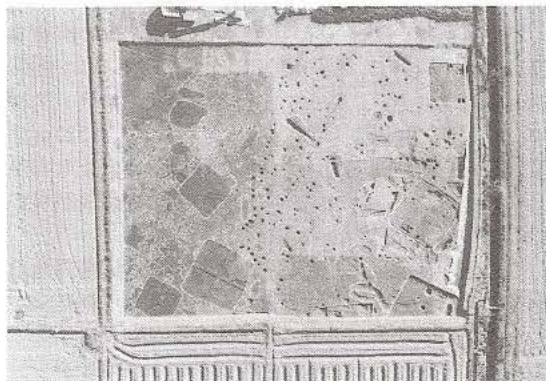
守山市伊勢町 おおす 大洲遺跡

民間の宅地造成工事に先立ち、約1,800㎡を対象に発掘調査を実施している。大洲遺跡は調査が進むに従って、弥生時代後期を中心とした集落遺跡であることが判明していて、伊勢遺跡の一部と考えられるようになった。

今回の調査地点は伊勢遺跡の中でも最も高所に位置していて、標高99.5mを測る。調査地は南半と北半部で様相が異なり、南半部は遺構密度が北半部よりも低い。南半部では、弥生時代後期の方形プランの竪穴住居が3棟検出されているほか、東西および南北方向に柱穴が列状に並ぶ遺構が検出されていて、数時期にわたる柵列が存在したものと推定される。

北半部でも竪穴住居が3棟検出されていて、柱穴群はこれに切られている。竪穴住居は弥生後期末から古墳時代前期の所産と推定される。北半部では柱穴が千数百個検出されていて、多数の掘立柱建物が存在したものと考えてよい。掘立柱建物は1間×3間、2間×3間、2間×2間と様々で、床面積は10~20㎡前後と推測される。

以上のことから、伊勢遺跡の中でも最も高所に位置



全 景

する大洲地区に、掘立柱建物群が営まれていて、ここでも柵列で居住地が区画されていたと考えられる。弥生後期末以降、竪穴住居がこれらの柱穴を切って営まれていることから、掘立柱建物が姿を消し集落規模も縮小していったとみられる。

(守山市教育委員会 伴野 幸一)

### 13. 自然流路から衣笠立飾りが全国初出土 守山市播磨田町 はりまだ 八ノ坪遺跡 やちのつぼ

守山市域中央部の播磨田町に所在する八ノ坪遺跡で宅地造成に先立ち発掘調査を実施した。期間は平成5年10月から平成6年10月で、開発面積約20,000㎡のうち、事前の試掘調査に基づき約16,000㎡を対象とした。

調査の結果、古墳時代前期の集落跡を検出したが、自然流路から特筆すべき衣笠の立飾りが出土したので報告する。まず、立飾りが出土した流路は幅5~8m、深さ1.5~2.0mの規模を測り、調査域を東から西に激しく蛇行しながら貫く。堆積覆土は上層から褐色系の粘質土層、有機質土層、そして灰色系の砂礫層に大別でき、そのうちの有機質土層から多量の土器、木器と共に立飾りは出土した。共伴する土器から4世紀末から5世紀末初頭に時期比定できる。

材質はカツラで柁目板を用いており、現存長約29.4



衣笠立飾り

cm、幅13.1cm、厚さ0.4~0.8cmの法量を測る。カーブしながら立ち上がる両面には縦、横三段で構成される組帯文を削りだし、内縁に1か所、外縁に2か所の鱗状の突起を具備し、黒漆を塗布している。管見ながら、これまでの出土蓋形埴輪の

なかでは奈良市・日葉酢媛陵古墳出土品に表現されているものに最も類似している。

これまでに、県内でも松原内湖遺跡(彦根市)、出町遺跡(近江八幡市)、石田三宅遺跡(守山市)、黒田遺跡(近江町)で衣笠部片が出土しているが、いずれも骨組部分で、立飾りは全国でも初めての出土となる。

衣笠とは、例えば、200m級の前方後円墳を築造し得る程の権力をシンボライズするものの一つであろうが、現在までに当遺跡では相応するような遺構は検出されておらず、その存否の検証が今後の課題となろう。

(守山市教育委員会 岩崎 茂)

#### 14. 奈良時代から平安時代初頭の倉庫群 安土町内野<sup>うちの</sup>内野遺跡

内野遺跡は、蒲生野の北端、箕作山の西麓に拡がる遺跡である。県営圃場整備事業に伴い約8,000m<sup>2</sup>の発掘調査を行なった。その結果、奈良時代前半の竪穴建物7棟、奈良時代から平安時代初頭にかけての倉庫を中心とした50棟以上の掘立柱建物、区画溝、井戸、土器溜り轍痕を伴う道路状遺構等を検出した。遺物には墨書土器数点や鎌・鍬・釘・椀型滓などの鉄製品が数点ある。また、当遺跡の東側から箕作山の山裾にかけては低湿地であることが明らかとなった。

掘立柱建物は当遺跡の全域から検出し、建物方位はほぼ正方向を示しており、時期によって数度ずつ振れている。倉庫群は遺跡の西側に位置し、柱通りを揃えて3間×3間や2間×2間のものを中心に一時期5棟前後で構成される。そして、その建物群を取り囲むようにして竪穴建物が点在する。

当遺跡の性格としては、その配置や規模から一般集落とは考えがたく、豪族居宅、郡衙の関連施設、荘園の関連施設等の可能性が考えられるが、部分的な調査のため現時点での判断は困難である。

(勲滋賀県文化財保護協会 藤崎 高志)



倉庫群

#### 15. 兵主神社庭園の排水溝跡と築地(土塀)跡 中主町五条<sup>ごじょう</sup> 五条遺跡



庭園排水溝・舟入の調査

兵主神社<sup>ひょうすけ</sup>は、養老2年(718)創建の縁起をもち、近江においては平安時代前期の貞観年代において、比叡神に次いで高い神位を授けていた神社である。

この神社の本殿南側には、昭和28年に国指定名勝となった鎌倉時代後期の作庭と考えられていた庭園がある。この庭園は、平成3年度から始まった保存修理事業に係る平成5年度の発掘調査において、現在の庭園の下から洲浜敷の護岸や遣水跡、さらに導水溝跡などが発見され、平安時代後期の作庭であることがほぼ明らかになった。

今年度の調査は、主庭園である本殿南側の園池からの排水溝跡と、同年代の神社境内の中心部分と主庭園を区画する築地(土塀)跡の調査を中心に行った。

検出された排水溝跡は、現況の排水口とほぼ同じ池尻西端から本殿西側をコ字に囲い、さらに北側にのびて直角に東に折れるもので、約160mを検出した。恐らく境内入口の楼門北側に巡るものと予想される。溝の形態は、断面逆台形の素掘り溝で、上幅1.2~1.7m、下幅0.3~0.7m、深さ0.6~0.8mで、緩やかな傾斜で流っていたようである。

築地(土塀)跡は、昨年度の楼門翼廊南側の調査で発見された遺構で、楼門南側の回廊状遺構から主庭園のある西側にのび、さらに主庭園の手前でクランクして主庭園全体を囲うものと思われるもので、約130mを検出した。楼門南側では基底部の版築状の盛土も残存していたが、その他では、心々約3.6mの両側溝が残るのみで、柱穴等は検出されなかった。

この様に、兵主神社で検出されつつある庭園関連遺構は、これまで知られていた主庭園(名勝庭園)と一連の平安時代の遺構として重要なばかりではなく、平安時代の地方の神社境内の平面構造や祭祀の姿を伝えるものとして、極めて貴重な例を提示していると言

えよう。

(中主町教育委員会 辻 広志)

### 16. パックされた縄文後期集落

能登川町 正楽寺遺跡



屈葬人骨

平成5・6年度にわたって実施した正楽寺遺跡の調査で、縄文後期前葉(北白川上層式1~2期)の集落跡が発見された。

主な検出遺構は、竪穴住居5棟、掘立柱建物群、環状木柱列1基、貯蔵穴(集石土坑)約100基、石器製作

跡3基、自然河川、土器塚などである。特に注目されるのは、帯状に広がる貯蔵穴群と肩斜面に土器塚をもつ自然河川との間に、幅20m・長さ60m以上にわたる空地(広場)があり、この一角に直径6mに並べられた6本の環状木柱列が発見されたことである。木柱列の中央部には直径1.3mもの焚火跡があり、木柱列内でかなり大きな火が焚かれていたことが明らかとなった。当地で通有の住居内炉跡は直径約0.5mしかなく、この焚火跡が木柱列の機能を特殊な祭祀遺構として裏付けるものといえる。

また河川の肩斜面に形成された土器塚は、長さ100m以上にわたっており、ここから多量の土器と共に土面・朱塗り結歯竪櫛・ペンガラ入鉢・垂飾などのほか、屈葬人骨も一体検出されている。このほか、トチノキなどの植物遺体、鹿角・イノシシ骨などの動物遺体も出土しており、河川内の随所で検出された倒木や根株もあわせ、当時の植生をはじめとする縄文集落の環境復元も可能と考えられる。

これら遺構・遺物の総体は、西日本ではこれまでになく多様な縄文文化の情報を提供するものであり、まさにパックされた縄文集落といえよう。

(能登川町教育委員会 植田 文雄)

### 17. 近江町山津照神社古墳の調査

近江町能登瀬 山津照神社古墳



山津照神社古墳 測量図

滋賀県坂田郡近江町に所在する山津照神社古墳は、湖北地方を代表する後期前方後円墳であり、明治15年に石室が開口した際、多数の遺物を取り出された。しかし、その後、石室はすぐに埋め戻され、昭和15年の京都大学考古学教室による出

土遺物の調査を除けば、詳しい研究はこれまでほとんどなされてこなかった。京都大学文学部考古学研究室は、文部省科学研究費の交付を受けて、94年7月から8月にかけてこの山津照神社古墳の墳丘測量と墳丘裾の発掘調査を実施した。その結果、復元全長46.2mの前方部が大きく開いた後期前方後円墳であり、周囲に石見型盾形埴輪や円筒埴輪を巡らしていることが明らかとなった。また、北側くびれ部外方の平坦面では、須恵器の大甕2、器台3、その他各種の須恵器、土師器が出土し、古墳祭祀のあとではないかと考えられた。今回、その場の性格は、確定できなかったが、造り出しになる可能性もある。墳丘の大半は盛土によって作られており、段築、周溝、葺石の存在は認められなかった。

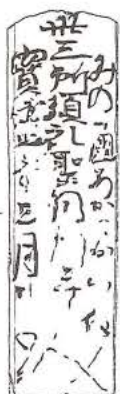
出土した須恵器は、東海地方の特色を部分的にもつものの、陶邑古窯址群のTK10型式併行と考えられ、共伴した埴輪も6世紀半ばの畿内の埴輪の特徴を備えている。したがって、近江町の塚の越古墳に後続する前方後円墳であることがわかった。以上の調査結果は、湖北における息長古墳群の性格を考えていく上で重要なデータとなるであろう。

また、当研究室では、山津照神社古墳石室内遺物の再整理や湖西地方を代表する後期前方後円墳である鴨稻荷山古墳との比較を併せ行い、これまでに行ってきた近江町内の古墳測量調査結果とともに研究報告『琵琶湖周辺の6世紀を探る』を刊行した。以上の調査は全般にわたって近江町教育委員会の多大な協力を受けている。

(京都大学文学部考古学研究室 高橋 克壽・森下 章司)

## 18. 西国三十三所巡礼の貴重資料出土

長浜市大辰巳町 鴨田遺跡



巡礼札実測図

鴨田遺跡は長浜市大辰巳町に所在し、大規模な弥生時代の集落跡として知られている。昭和63年の長浜新川改修工事関連の調査において、鴨田遺跡の西方端に鎌倉時代から室町時代の集落跡が確認された。平成4年の長浜新川改修工事関連の調査においても同集落跡が検出され、土坑状遺構より「西国三十三所巡礼」に使用される巡礼札一枚が出土した。翌年の調査においては、比較的広い範囲で調査され、集落の内部構造が姿を現わした。数棟の掘立柱建物や、それに伴うと思われる井戸跡、

区画溝などが検出された。そして東西方向に横切る他よりも比較的幅の広い区画溝から、50点以上の巡礼札が一枚所にまとまって出土した。出土状況からみて、奉納されたような様子はなく、投棄されたかのようにあった。本来巡礼札は一定期間の年月を経て一括で焼却されるものであるが、このように当時の姿のまま出土したことは、今後の西国巡礼の研究において重要な資料となるであろう。同時に何故焼却されなかったのか、という問題点も残る。札に書かれた墨書の内容からは出身地、年紀、人数などが読み取れた。西は長洲、東は遠江國など、広範囲で巡礼が行なわれていたことが分かった。注目されるのは年紀の部分であり、墨書の確認できる巡礼札のほとんどに、宝徳4年(1452)の年紀が見られることである。それらは3月～5月という数か月間に使用されたものばかりであった。他に三具足と呼ばれる供養具の内の、花瓶と燭台なども出土しており、「堂」などの施設が存在した可能性がある。

当時の姿のままの巡礼札から読み取れた文字資料によって、すでに室町時代には西国三十三所巡礼が広範囲に普及していたことが実証された。

(財滋賀県文化財保護協会 重田 勉)

## 19. 57年ぶり 甕棺調査

伊吹町杉沢 杉沢遺跡

伊吹山麓の杉沢遺跡は、昭和13年小林行雄が縄文時代晩期の合口甕棺2組を発掘したことで知られている。また明治以降、石斧を中心として、御物石器など多種



甕棺出土状況

多様な磨製石器が出土している。近江の東の玄関口として、東日本の影響をうけて成立している遺跡である。

今回、畑作中の不時発見によって偶然ながら57年ぶりに杉沢遺跡の甕棺を調査することになった。

発見者である土地所有者の快諾を得て、甕棺の埋まっている約1.5m四方で調査をおこなった。

甕棺は、地表約20cm下から出土した。出土したのは2個の甕形土器で、1個はほぼ水平にして棺とし、もう1個は割られて蓋として利用されていた。残った土器片を上にかぶせて埋葬されているのが確認された。

当遺跡では、昭和13年の他に、戦後間もなくもう一組が出土しており、いずれも合口甕棺であったが、今回の例は、合わせ蓋の甕棺である。

土器中の土には、炭片をわずかに検出したが骨片は見られなかった。

使用された土器は、晩期終末の長原式(馬見塚式)土器で、共に素文の突帯を一条めぐらせたもので、棺の方は口径38cm、高さ42cmでくびれをもつもの、蓋の方は、口径44cm、高さ38cmの大型のものである。

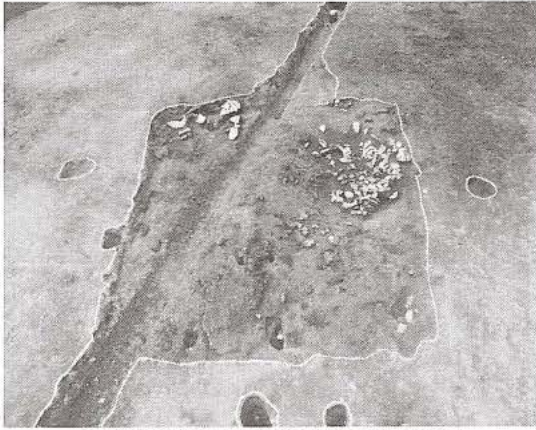
(伊吹町教育委員会 高橋 順之)

## 20. 古墳群・奈良時代の焼失住居を検出

今津町日置前 日置前遺跡

高島郡今津町日置前・酒波さなみに所在する日置前遺跡は昭和57年度から4次にわたり、ほ場整備に伴う事前調査が実施され、東西13町・南北8町の範囲内に官衙・寺院・集落などが計画的に造られた都市的な遺跡であることが確認された。今回の調査区周辺は、遺跡の東部の集落的性格の強い地区で、平成6年6月から10月まで、消防施設用地造成に伴い事前調査を実施した。調査区の東側は、平成3～4年度に、湖北バイパス建設に伴い調査が実施されており、円墳7基、奈良時代から平安時代の竪穴住居9棟、掘立柱建物11棟、柵等が検出されている。

調査の結果、バイパス調査区と同様の円墳6基、竪



3号竪穴住居(焼失住居)遺物出土状況

穴住居3棟、掘立柱建物1棟を検出した。古墳は6世紀代の直径7.5~11.5mの小円墳で、主体部は後世の開墾によって削平されていたが、周溝内から供献土器、鉄製鋤先などが出土している。

竪穴住居は、一辺3~5.5mの南北にやや長いプランをもち、住居内に焼土、炭等を含む円形・楕円形の土坑が検出されている。この内3号住居は、主軸を磁北にもち、長辺5m、短辺4.5mのもので、炭火材が多量に検出され、火災によって焼失したものと考えられる。出土遺物には、8世紀前半の須恵器の杯身5点(高台付3点)、杯蓋4点、平瓶1点、高杯1点、甕5点、土師器の杯1点、皿1点、長甕2点以上、小甕1点、製塩土器1点の他、鉄斧2点、用途不明のコの字形の鉄器3点が出土している。一部近世の溝で削平されているものの、多くの土器が完形に復元でき、住居内で使用されていた土器等のセット関係が判明する貴重な資料である。

(今津町教育委員会 葛原 秀雄)

## 21. 伝承・三矢千軒遺跡あらわる

高島町 みつやせんげん 三矢千軒遺跡

伝承三矢千軒遺跡は高島町東北の琵琶湖中に所在するいわゆる湖底遺跡である。

昔より永田浜の沖合には、寛文2年5月1日(1662.6.16)に高島町音羽地先を震源とするマグニチュード



伝承・三矢千軒遺跡

M7.6の地震によって湖中に水没した村が所在し、石垣や石の鳥居が残存していると伝えられていた。

近年も、永田浜沖には石列が認められ、三矢千軒遺跡として周知されている。

昭和58年(1983)の秋から冬にかけて琵琶湖が異常渇水し、水位が-1m前後まで下り船上より石列が確認された。平成6年(1994)の夏、この年の夏は観測史上例のない異常渇水となり最低水位-123cmを記録し、写真に観るような状況で石列の一部が確認され、これらの石列は東へのびて北へまがることが判明した。

湖岸にあつては、多量の土器類や木杭・木柱が渇水した浜に出現した。

この状況は、当遺跡の他に北から永田浜と萩の浜北・南にもみとめられた。

永田浜遺跡は、鯉川と糸道川の間に土器類が浜の表面で採取され、特に奈良時代から平安時代にかけての須恵器が多く遺跡の北側を流れる鯉川が形成した砂洲状の高台に集落が所在していた可能性をのぞかせている。つぎに、萩の浜北・南遺跡については、北遺跡では、中世から近世にかけての陶・磁器類が多く、南遺跡では奈良から平安にかけての須恵器類が多くこれらの時期に集落が営まれていた可能性がある。

今回の琵琶湖の渇水当遺跡の他に新しく永田浜・萩の浜北と南遺跡が発見された。ただ、これらの遺跡の詳細と地震の関係は今後の課題とする。

(高島町歴史民俗資料館 白井 忠雄)

## 刊行報告書案内

- 1) 妙楽寺・尼子遺跡〔県営かんがい排水9-1〕
- 2) 大東遺跡II、今川城遺跡ほか〔ほ場整備20-1〕
- 3) 紀要7号
- 4) 墓ノ町遺跡、古堂遺跡、樋之口遺跡、十禅寺遺跡〔ほ場整備20-5〕
- 5) 鴨田遺跡発掘調査報告書III
- 6) 小比江遺跡・太田遺跡
- 7) 今川東遺跡・十禅寺遺跡〔県営かんがい排水10-1〕
- 8) 加茂遺跡・一ノ坪遺跡発掘調査報告書
- 9) 柿木原遺跡〔県営かんがい排水9-5〕
- 10) 蔵ノ町遺跡〔ほ場整備20-7〕

## 232. 神功皇后の鉞 まさかり

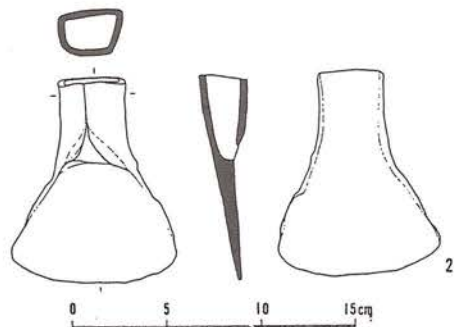
山津照神社は坂田郡近江町能登瀬に鎮座する。当神社はかつては青木大梵天皇、青木大明神、または青木宮と稱した。その起因は鎮座の地を青木の里と呼ぶことにあるらしい。青木の地名は、「あふき」から来ており、古代豪族の墳墓(現在の境内の山津照神社古墳か)を一般の民が仰ぎ尊んだことから「仰ぎの里」という名が付いたらしい。

また他の説によると平安時代の神仏習合により、山津照神社にも別寺を置いて社坊とし、その寺の僧によって神に奉仕することとなつたらしい。当社に社坊の置かれた年代は定かではないが、藤原鎌足より13代の孫の青木武藏守頼忠が入道してこの地に住んだという。その後彼の子孫が職を受け継いでいき、両氏の5代にわたる祖先たちを合祀したので、青木大梵天皇と稱されるようになったという。

青木大梵天皇は明治の初めの神仏分離により、社名を山津照神社と改め、国常立尊を祭神とし、青木氏5代の祖神は別に社を立てて分祀された。

山津照神社には「神功皇后の鉞」という社宝がある。神功皇后が新羅に出兵する際に用いたものである、という伝承が残っている。伝承の内容から考えると5世紀代の遺物ということになる。

「神功皇后」の鉞は全長120cm余りのものであるが、刀部も柄部も鉄からなる。刀部はやや厚めの1枚の鉄板で打圧痕等は見当たらない。柄の上部にはツバ止めのような装飾が2箇所みられ、他の装飾品の取り付け部分のようにも見える。「神功皇后の鉞」の注目すべき機能は、柄に長い槍が内蔵されていることである。鉞の柄を持って勢いよく前方に突き出すことにより、内蔵された槍が柄から射出される仕組みになっている。射出された槍はそのまま柄から外へ飛び出すわけではなく、槍の下端部にある小さなドーム型の返しが柄の



5世紀代の鉄斧(滋賀県・黒田長山4号墳出土)



内蔵する槍を伸ばした「神功皇后の鉞」

上端部の小さな穴に引っ掛かって固定され、外への飛び出しを食い止めるようになっている。槍を伸ばした状態の鉞の全長は2m以上にもなる。

5世紀代に主に用いられた鉄斧は、木柄装着用に鉄板を折り曲げてつくられた袋部をもつ有袋鉄斧と呼ばれるものなどがある。「神功皇后の鉞」は考古資料にみられる鉄斧とは全く異なる形態をとり、槍の機能までも有している。当時のものとは考えがたい。おそらく後世の珍品に当地域に存在した古代豪族・息長氏に関する伝承が結びつき、明治の初めの神仏分離のときに混入してきたのであろう。しかしながら息長氏の本拠地とされる地に、「神功皇后の鉞」という名でひっそりと息長氏の栄光が今もなお残っているのは意義あることではないだろうか。

(重田 勉)

※鉞の写真撮影、および執筆にあたっては宮崎幹也氏の協力を得た。この場を借りて感謝の意を表する。  
〈参考文献〉

『改訂近江國坂田郡志』(滋賀県坂田郡教育委員会 1971)

『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書VI』(滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1981)